

『早春雑感』

西脇市立西脇病院 病院長

岩井正秀

新型である。新型コロナウイルスである。今年の年頭から日本を、いや世界を席卷している。その正体は掴みがたく、検査も診断も十分には確立されていない。ましてや治療法に至っては、まだ世界中が模索している状況である。都会も田舎も、例年の同時期に比べると随分と鳴りを潜めているようだ。この北播磨の地においても様々な組織が情報を共有し協力して、未知の災厄への対応を図っている。当院も常に疾患の現状を把握し病院として何ができるのかを検討した上で、そのなすべき役割を冷静に担っていかねばならない。

診療報酬である。診療報酬改定である。二年に一回行われる改定の全貌が徐々に明らかになってきた。患者さんに対する良質で適切な診療を行いながらも、病院は同時に健全経営を求められる。そこに診療報酬の改定は大きな影響を与える。この改定内容に病院はできるだけ迅速に、的確に対応しなくてはならない。そして、それは幹部のみならず、すべての病院職員が高い共通意識を持つことにより、可能になるのではないだろうか。

働き方である。働き方改革である。長時間労働を是正し、柔軟な勤務環境を構築しなくてはならない。総じて病院の勤務は劣悪な条件が多いといわれ、医師、看護師を始めすべての職種がその働き方を見直し、改革するように指示が出ている。しかしながら患者さんの満足度は低下させてはならない、経営状態は悪化させてはならないと言う。勿論医療の質は落としてはならないし、安全も確保しなくてははいけない。こういった非常に困難な課題に直面し、多くの病院で、幹部の人達は誰もが頭を抱えているのではないだろうか。

たとえば、働き方改革のためには、無駄を省いて業務内容を短時間で充実したものにすれば良いのだ、と言われる。なるほど職業によってはそれも可能かもしれないが、医療の現場では時間配分の予測が立たないことの方が多い。この仕事は必ず病気で苦しむ人達を対象とするからだ。医療には効率的という言葉が馴染まない面のあることが、あまり理解されていないように思える。とりわけ安全、リスク・マネジメントに関しては、一見無駄に思えることが重要であったり必要であったりする。強い野球チームのキャッチャーは、打者が内野ゴロを打つたびに毎回その打者と共に一塁方向に走る。内野手が一塁に暴投した場合を想定してのことである。そのようにしてカバーすれば、たとえ一塁でアウトにできなくても、バッターランナーが二塁に進むのは防ぐことができるからだ。リスクをマネジメントするとはそういうことである。

気になることを沢山抱えたまま病院から一步外に踏み出すと、まだまだ風は冷たい。しかし、ふと見ると、道端には名も知らない小さな花が咲いて揺れている。こんな風に吹かれたくらいで、散ってしまう気はさらさらないといった風情だ。

ややこしい問題の集積した世界にも、それでも春はやって来る。そして、気温の上昇があり柔らかな日差しがあり、その中で別れがあれば、新しい出会いもあるだろう。春の嵐なぞに吹き飛ばされることなく、しっかりと歩いて行きたいと思うのである。

2020.3.31